

志雲会東京第一回勉強会

テーマ：「古事記 大国主命の国譲り」 要約（その9）

松田 武

大国主神の国作りは、少名毘古那神と大物主神の協力により、順調に進んでまいりました。そして、その豊かになった葦原の中つ国を高天原からご覧になった天照大御神は、この国は根の堅州國のゆかりの神が治めるのではなくて、私の子供が治めるべき国である、と考えます。その天照大神のお考えが、大国主命の国譲りの発端であります。

1 1. 天照大御神の天忍穗耳命へのご神勅

天照大御神は御子の正勝吾勝勝速日天忍穗耳命に対し、次のご神勅を発せられ、天降り（あまくだり）を命じられます。

ちあきのながいほあき

まさかつあかつかはやひあめのおしほみみのみこと

「豊葦原の千秋長五百秋の水穂國は、我が御子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の知らず國ぞ」

すなわち、豊葦原の千秋長五百秋（千年も五百年の長く続く）の水穂國は我が御子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の治める国である、とのことであります。

そのご神勅を受け、天忍穗耳命が高天原から降りられる途中、天の浮橋から地上を眺められました。そしたら、葦原の中つ国は何やら騒々しい様子でありました。（原典：伊多久佐夜藝弓有那理＝いたくさやぎてありなり）。そこで、天忍穗耳命は高天原に戻って、この状況にどう対応するべきか、天照大御神にお指図を仰がれました。

（注）正勝吾勝勝速日天忍穗耳命および次に出てくる天菩比神はともに天照大御神の御子であります。

この二柱の神は天照大御神が速須佐男命と誓約（うけひ）を行った際、速須佐男命が天照大御神の勾玉の玉飾りを噛み砕き、霧のように吹き出した時に生まれた男神五柱のうちの二柱の神であります。人間風に言えば、天忍穗耳命が長男、天菩比神は次男ということになります（古事記 大国主命の国譲りその3 参照）。

（1）天菩比神（あめのほひのかみ）の派遣

そこで、高御産巢日神（たかみむすひのかみ）と天照大御神が八百万の神々を天安河之河原（あまのやすのかわのかわら）に召集されました。そして、思金神（おもいかねのかみ）を呼んで「我が子天忍穗耳命に葦原の中つ国を治めるよう命じたが、そ

の国には暴威を奮う国つ神どもが大勢いるようである。（原典：荒振國神等之多在）どの神を遣わしたのか、意見を述べよ」と仰せられました。それに対し、思金神は「天菩比神を遣わすのがよろしいかと存じます」と申し上げられました。

そこで、天照大御神は、葦原の中つ国に天菩比神を派遣されました。ところが、この神は大国主神に媚びへつらい三年経っても復命しませんでした。（原典：媚附大国主神、至于三年、不復奏）

（筆者コメント）

「この天菩比神を派遣する目的は、天忍穗耳命の露払いとして葦原の中つ国に降りて、統治者である大国主神にその地位を天忍穗耳命に譲るよう説得することにあります。その説得の使命を帯びて大国主神に会ったところ、恐らく大国主神の威厳、人柄に魅せられて、使命そっちのけで、大国主神に付き従った、ということでもあります。

三年経っても天菩比神は使命遂行状況を天照大御神に報告するため帰って来ませんでした。そこで、再び神々を招集し、次善策のお打合せをされました。その結果、天菩比神は丸腰で説得に赴いたので、武威を示せず、説得出来なかったのではないかと、ということで、天若日子には弓矢を持たせて派遣することになりました。」

（２）天若日子（あめのわかひこ）の派遣

今回も高御産巢日神と天照大御神がの神々を召集され、「どの神を派遣すべきであろうか」と問うたところ、神々が話し合いを行った後、思金神が「天若日子が相応しいと存じます」とお答えになりました。そこで、天照大御神は天若日子に天之麻迦古弓（あめのまかこゆみ）と天之波波矢（あめのははや）を与えて、葦原の中つ国に派遣しました。

しかしながら、天若日子は中つ国に到着するや大国主神に取り入り、大国主神の娘、下照比賣を娶ることに成功します。実はなんと、天若日子はこの国を我が物にしようとして企んでいたのです。そして、八年間も高天原に復命しませんでした。

（原典：天若日子、降到其國、即娶大国主神之女、下照比賣、亦慮獲其國、至于八年、不復奏。）

そこで、天照大御神と高御産巢日神は神々を召集され、「天若日子はさっぱり復命してこない。どうして、中つ国に長逗留しているのか、その訳を尋ねるにはどの神を遣わせばいいのだろうか」と問いかけられました。その問いに、集まった神々と思金

神は「鳴女（なきめ）という名の雉（きじ）を遣わすのがよろしいかと存じます」と答えられました。



鳴女を遣わす様子

天照大御神は鳴女に次のように仰せられました。「お前は行って天若日子にこう尋ねよ。そなたを葦原の中つ國に遣わせたの、その国に棲む荒ぶる神どもを言趣け和せ（ことむけやわせ＝説得し、帰順させる）ることにある。しかるに、八年経っても何ゆえ復命しないのか。（原典：汝所以使葦原中國者、言趣和其國之荒振神等之者也、何至于八年不復奏。）」

天照大御神の命を受けた鳴女は天降り、天若日子の住まいに赴き、門の上の湯津楓（ゆつかつら）の枝に停まって、天照大御神のご伝言を天若日子に伝えました。この時、鳴女の声聴いた天佐具賣（あめのさぐめ＝陰密なるものを探り出す巫女。鳴女の声聴いて吉凶を判断します。）は、「この鳥の鳴き声は甚だしく不吉です。射殺してしまいなさい」と天若日子に助言致します。

天佐具賣の助言に従って、天若日子は天の神から与えられた弓と矢を取り出し、その雉を射殺してしまいます。その矢は雉の胸を貫き、逆さまに射上げられ、天の安河の河原におられる天照大御神と高木神（たかぎのかみ）のところまで届きました。高木神とは高御産巢日神の別名であります。

高木神はその飛んで来た矢を眺められました。すると、その矢の羽には血がついておりました。そこで、高木神はおっしゃいます。「この矢は、天若日子に与えた

矢である。」そして、その矢を神々にお見せになりながら、さらにおっしゃいます。「もし、天若日子が自分に与えられた命令に背かず、悪い神を射た矢がここまで飛んで来たのであれば、天若日子に当たるな。（原典：或天若日子、不誤命、爲射惡神之矢之至者、不中天若日子）もし、邪心を抱いているのであれば、この矢に当たって死ね。（原典：或有邪心者、天若日子、於此矢麻賀禮）」（麻賀禮：まがれ＝災難あれ、即ち、死ね。）と宣言されて、その矢を取って、その矢が飛んで来た穴から下に突き返えされました。

その矢は朝まだ寝ていた天若日子の胸に命中し、天若日子は死んでしまいました。

そこでまた天照大御神は神々に「今度はどの神を遣わしたらいいであろうか」と仰せられました。そこで、思金神と他の神々が「天安河の河上にある天の石屋に棲む伊都之尾羽張神（いつのおわりのかみ）か、その子の建御雷之男神（たけみかずちのをのかみ）を遣わすのがいいでしょう」と申し上げられました。種々打ち合わせの後、天照大御神は天鳥船神（あめのとりふねのかみ）を建御雷之男神に副えて、葦原の中つ国にお遣わしになりました。（原典：爾天鳥船神、副建御雷神而遣。）（筆者コメント：いよいよ真打登場です。）



建御雷之男神

（注1）天照大御神は御子の正勝吾勝勝速日天忍穗耳命に対してご神勅を発せられ、天降りをもじられました。しかしながら、天忍穗耳命は葦原の中つ国を眺めて、そこには荒ぶる神々が数多く棲んでいる、と天降りを躊躇します。

そこで、天忍穗耳命の天降りに先立ち、荒ぶる神々を説得し天つ神に帰順させる交渉役を中つ国に派遣することになります。

このまとめの読者はお気づきの通り、誰を派遣するか、ということを決めるため、その都度天照大御神は神々および思金神を招集し、衆議します。その結果、知恵第一の思金神が提案した神を天照大御神が派遣の任命をされる、という手順を踏んでおります。

天照大御神そして高御産巢日神はあらゆることを自ら決める絶対君主ではなく、またいわゆる全知全能の神でもない。そして、思金神も宰相という立場でもない。思金神はいわば参謀のような立場だと言えます。

しかし、その参謀も判断を誤ることがある。今回は今風に言えば二度判断ミスを致しました。しかし、諦めることなく、2の矢、3の矢を打つ。つまり衆議し、その中で最善と思う策を選択し、失敗しても諦めない、というのが、高天原の方式のようです。

筆者コメント：問題が発生する都度、多数の神々を招集して皆で話し合う、という高天原の方式は、明治維新の五か条のご誓文第一条「広く会議を興し、万機公論に決すべし。」の精神に通ずるのではないか、と言うのは穿ち過ぎでしょうか。つまり、五か条のご誓文第一条は、維新後間もないわが国が、近代国家にならんとし、当時先進国であった西洋の政治手法を真似して取り入れたというものではなく、神代の高天原で神々が集まり話し合う、つまり“広く会議を興し”は行われていた、ということのを改めて条文化したと言えるのではないか、と思います。

（注2）交渉役として三番目に任命された建御雷之男神（たけみかづちのをのかみ）の出自は以下の通りです。

伊邪那美神は数々の島々を生んだ後、山の神、川の神など様々な神をお生みになられます。そして、火の神である火之迦具土神（ひのかぐつちのかみ）をお生みになられる際、伊邪那美神は女陰（ほと）に火傷を負い、それが原因でお亡くなりになります。

妻を失い嘆く伊邪那岐神は伊邪那美神を葬ったあと、十拳劔（とつかのつるぎ）を抜いて、火之迦具土神の首を撥ねてしまいます。その際、その血潮が多く、岩（湯津石村《ゆついわむら》）に飛び散り、その飛び散った血から生まれた神の石柱が建御雷之男神であります。

建御雷之男神とは「勇敢な雷の男神」という意味で、劔の威力を讃えたもの、ということです。本稿まとめ2で述べました通り、建御雷之男神は茨城県の鹿島神宮のご祭神であります。

（続く）

建御雷之男神（たけみかづちのをのかみ）という、大国主命の国譲りにおける高天原派遣の最強の交渉人がいよいよ登場です。本稿でその真打の交渉振りまで進んでもよかったのですが、ここは一息入れて、そのドラマチックな交渉の経緯は次稿で眺めたい、と思います。